

R S K 山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 5 二〇二一年七月十九日

星座の娘

小林章子 (R S K アナウンサー)

伊藤正弘 (R S K アナウンサー)

白根直子 (赤磐市教育委員会熊山分室学芸員)

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。

小林 今日もよろしくお願い致します。このコーナーも五回目となりました。永瀬清子さんの作品にはいろんな表情があつて、今日はどんな一面を知ることができるだろうと楽しみです。伊藤さんはこれまでの放送で、永瀬さんにどんな印象を持っていますか？

伊藤 詩の中にご自身の体験とか思いとかがちりばめられていて、一見、ただの物語とか作品のように思うんですが、伝えたいメッセージがどんと詰まっているという印象ですね。

白根 そんなふうに見てくださっているんですね。これから年を重ねた時に再び思うことがあったり、新たに発見ができたたりだと思いますので、ずっと永瀬さんの詩を読んでいただきたいです。

小林 家庭を持ったり、子どもができたりした時に、また感じ方が変わってきたりしますよね。

さて、今日は永瀬清子さんのどんな詩をご紹介しますか。

白根 今日は、「星座の娘」を紹介します。この詩には、娘時代の永瀬さんが自分の生き方について思い悩む心を書いています。

星座の娘

身近くせまつて来る人々の愛が

夜更けには

私の肉身の部分部分を作つてある

魂がそれらの中を流れめぐり

私は

巨いなる天空の神話の娘が

星の鏡で天にとめられてあるみたいな束縛を感じる。

星々は夜には

幾多の宿命を含む地上からの視線で

原始以来みがかれた鉱物だ

北より南よりの

喜び悲しみを惹いて

重い期待を集めてある

私は私自身では

軽く飛びやすい者だけれど

それらの星に刺されてみて

多くのつぼみを含んだ椿のやうに感ずる。

暗い夜を通して私にまでうかび上る

花咲かうとする蜜にみちた熱意が苦しい。

星々の鬱血質の重さ！

自分ほどの引力にまかしていいのか

私はどこへよろめくのか

夜が一刻一刻凝つてゆく時

天の神話の娘は

何億年はりきつた

星と星との銀緑の綱をたち切り

青い蜘蛛のごとく

しきりに空間へつりさがらうと意志しまいか

あゝ多くの病める恩愛から

寒い自我を割きとつて

錘のやうに

唯一の重力を信じて下へ！ 下へ！

(『永瀬清子詩集 現代詩文庫 1680』思潮社 一九九〇年二月)

小林 伊藤さん、この詩からどんな印象を受けますか？

伊藤 自然の描写から情景が、ぱーっと頭に浮かびましたね。

白根 永瀬さんは、自然についての描写を詩の中によくちりばめています。そうしたところを見てくださってうれしいです。

永瀬さんが生きた時代は、女性の幸せは結婚で、「良妻賢母」であることが世の中に認められる生き方でした。そして永瀬さんは家を継がなければならなかった。ですから、永瀬さんの両親は、女学校を卒業したらすぐに結婚させたいと考えていました。となると詩人という生き方は、両親の愛情に反することになってしまい、自分の理想と現実を引き裂かれるような思いでいらしたと思います。

小林 この詩を書いたころのことを、永瀬さんがこんな風に語っています。

やっぱり自我が強いというか、自分自身のことをはっきりさせたいという気持ちをはじめにあったと思うんです。それは、いまは世間の人とお話しているときに、ただ表面的な話でなくて自分の本当の心のお話したいと思っているのに、相手の人があんまりなんていうか表面的にしか解釈してくれないような気がして、で、なんとか自分の本当の心を書いておきたいと、そういうふうな希望がだんだん大きくなって、それで詩を書くようになったんだと思います。あんまりね、お話が上手じゃなくて話すときどもってばかりいた、そういう風な娘でしたから。

小林 永瀬さんにこういう気持ちがあったことを知って、「星座の娘」

を読むと心の奥底を詩としてさらけ出すことには、思い切った勇氣も必要だったかもしれないが、この詩をきっかけに、思いを共有できる人と繋がりたい、という気持ちもあったのかなと感じました。

「星の鉦で天にとめられてゐるみたいな束縛」というのは、当時の価値観に縛られることの不自由さのことでしょうか。詩の後半は、そういった束縛を感じながらも「自分らしい表現を諦めない」「心の奥底を語っていきたい」という決意のようにも感じました。

白根 そうだと思います。永瀬さんは、「ただ表面的な話でなくて自分の本当の心の底」を語りたいたいということを、機会あるごとに書いています。そして、「沢山の生き方の中で心と言葉をえらびとるのは本当にむづかしい一生の仕事」と考えていました。だからこそ、永瀬さんは詩と生き方がつながっている、といわれるのだと思います。

小林 それにしても永瀬さんが生きたのは、良妻賢母がよしとされ、女学校への進学さえ、よい縁談のためという時代ですから、詩人になるというのは、ずいぶん突飛なことだったんでしょね。

白根 そうなんです。短歌や俳句は女性の教養として認められていたんですけども、詩を書く女性は、残念ながらもまだまだ少なかつたのです。

小林 永瀬さんが生きた時代は、今とは全く違う価値観ですが、それでも詩人になりたいと考えたことは、いかに大変なことだったかと推測します。

白根 倉敷市出身の薄田泣菫という詩人がいます。現在、倉敷市と薄田泣菫顕彰会が顕彰活動をしています。泣菫は、大阪毎日新聞社

の社員で、新聞に連載していた随筆が好評だったので、多くの読者がありました。ですから永瀬さんは、泣菫のように新聞に随筆を書く仕事に就きたいと考えたこともありました。ここには、経済的な自立により自分の自由を手に入れることができるのではないかと、という考えもあったと思います。

小林 永瀬さんの悩みは、今の私達にも通じるところがありそうですね。

白根 そうですね。この「星座の娘」にある複雑な思いは、晩年の永瀬さんならば、もう少しやわらかい言葉や表現で書いたのではないかと思います。この全体的に少し硬い言葉や表現は、娘時代の永瀬さんでなければ書けなかつたと思われまので、そういうところも初期の詩の魅力だと思います。

小林 永瀬さんも人生にいろんな色合いの時期があつて、その時期ごとに表現も変わっていますから、そこも楽しみどころのひとつです。白根さん今日もありがとうございました。

伊藤 ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二一年七月十九日現在のものです。

〈参考文献〉

永瀬清子「女性が詩を書くこと」『すぎ去ればすべてなつかしい日々』福武書店

一九九〇年六月